

第1学年3組 特別支援

自分のよさに気づき、学校生活への意欲を高めるために

—自立活動のあり方を模索しながら—

山口 恭子

本年度は自閉症・情緒障害学級が新設され、1年生2名が入級した。2名とも学力は低いが、主に通常学級の生徒と共に学習や生活を送る中で、学年の一人として元気に学校生活を送っている。時には、周りの状況をうまく把握できずにアドバイスを求めてきたり、粗暴な行動をとって人に迷惑をかけたことがある。その都度個別の声かけが必要である。自分自身に対し自信がなく、投げやりな言動をとる場面も見られる。このような状況を踏まえ、自分のよさに気づき自信をもたせ、学校生活への意欲を高めるための自立活動のあり方について日々考えてきた。

自立活動の学習内容としては、「心身の安定」として、3組での数学や英語の授業時間の一部を使い、百人一首やトランプをしてリラックスしたり、10月からは、パソコンを使ったカレンダーの制作を週1時間程度取り入れたりした。また、1年1組での道徳や学級活動の中で、自立活動の観点を加味した題材設定を行い実践したのものもある。生徒の日常の学校生活を大事にして支援してきた。

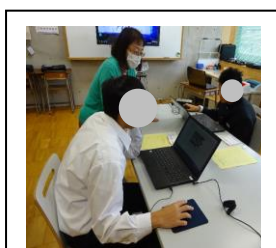
1. 学びの実際

①マイカレンダー作り (10月～2月末)

パソコンを使って、自分の興味のある画像を用いて来年度のカレンダーを作成する。パソコンの操作の方法を身に付け継続して取り組む中で、集中力、持久力、表現の工夫、友達とのコミュニケーションなどの面で、成果が見られるのではないかと考えた。自分の力でカレンダーを仕上げることができたという自信が、少しでも自己肯定感につながればと思いい実践に取り組んだ。

①画像集め (第1～2時)

カレンダーで使いたい画像をインターネットから探し自分のフォルダに集めた。Aさんは、ゴジラが好きなので、ゴジラの画像を上手に選んでいた。Bさんはラグビーや野球、猫やパンダなど興味があるものをいろいろ選んだ。ローマ字入力に自信がないと言っていたBさんだが、やり始めたら「先生、僕、ローマ字打ちできるわ」とファイル名をローマ字で入力していた。



(カレンダー作りを楽しむ)

Aさんは、Bさんにかかわられることを警戒してBさんから離れた席で作業していたが、Bさんは人に構うことなく自分の作業に没頭していたので、トラブルになることはなかった。

②カレンダー編集 (第3時～)

用意した word バージョンのカレンダー枠を使って、画像貼り付け、月名、曜日、日付の入力作業に入った。二人とも、月名を画像に貼り付ける作業では、個性的な図形の貼付を工夫していたので驚いた。月名と曜日名は英語を使うように指示した。「面倒くさい」と言いながらも、毎月繰り返し英語での入力をしていった。見本の単語帳を見ながらであるが、二人ともスペルを間違いなく入力できていた。

土曜日と日曜日は文字色を変えたり、文字や数字の大きさを工夫したり、自分なりにいろいろ工夫している様子がとてもほほえましく思えた。



(Bさんの3月カレンダー)

第6時のことである。授業もあと10分というところでBさんが「もう飽きた」と言い出した。あれ、もうカレンダー作りが嫌になったのかな、困ったなと思っていたら、「今日はもう疲れたけど、次の時間に〇月号を作るわ」とのことだった。よかった。カレンダー作りに飽きたのではなかった。

常に二人のトラブルを心配したが、BさんがAさんに絡むことはほとんどなく、むしろAさんが「画像の貼り付け方、忘れた」と言うのと「俺が教える」と言ってアドバイスするなど、二人が親しく教え合っている場面が見られた。

定期テスト前にはカレンダー作りの時間を勉強の時間に充てたり、行事のために時間がとれなかったりしたが、「さあパソコンの時間や」となると素早くパソコンの準備をして作業に入っていた。2月末でAさんは7月まで、Bさんは6月までのカレンダーを完成させた。(この後、臨時休校となる)

(2) 交流学級での道徳学級活動を通して

ほとんどの時間を通常学級の1年生と過ごしている二人にとって、自立活動を加味したエクササイズを通常学級の生徒と一緒にしたいと考え、道徳や帰りの会の時間を利用していくつか実践した。

① 大人度チェック

「自己分析アンケート」と「将来仕事をするために必要なこと」という2つの質問紙を通して、「大人度チェック」として自分の自立度を見直す学習をした。

将来仕事をするために必要なこと。
いつもできる、ときどきできる、いつもできないのどれかに○をつけよう。
できていれば、将来仕事をするときもバッチリ！

名前 _____

必要なこと	いつもできる	ときどきできる	いつもできない
① はっきり「はい」と返事をする。「はーい」「はいはい」「うん」×	○	○	○
② 自分から挨拶する。 「おはようございます」「おねがいします」「ありがとうございます」など	○	○	○
③ 大きな声ではっきりと、相手の目を見て話す。	○	○	○
④ 言いたいことを、詳しく話すことができる。「先生、これ・・・」×	○	○	○
⑤ 大人の様に、正しい言葉遣いで、礼儀正しく話すことができる。	○	○	○
⑥ 分からないことは自分から聞く。	○	○	○
⑦ 人の話を、きちんと聞いて行動している。	○	○	○
⑧ きまりを守る。(ヘルメット、風切旗、不要物を持ってこないなど)	○	○	○

(資料 「将来仕事をするために必要なこと」 共作2012)

Aさんは、できないことはできないとチェックしたので、点数は低い結果であった。「嫌なことがあっても人や物にあたらぬ」という自分の問題点も、ちゃんと理解していた。ところがBさんは意外に自己評価が高く、ほとんど「できる」として評価していた。Bさんには特に「マナーを守る」「姿勢良く座ったり立ったりできている」など、日頃できていない点に気づいてほしかったが思惑が外れてしまった。Bさんは、できていないことには気づいていても、それを「できない」と自分で評価したくなかったのかもしれない。

この授業でまずかったのは、チェックした後のフォローをきちんとしなかったことである。チェックすることで少しは自己理解ができたようだが、自立への自覚と今後の進むべき道までを意識させるこ

とができず、やりっ放しになってしまった。

② ひとことスピーチ

交流学級の1年1組の生徒も、人前で大きな声ではっきりと話ができる生徒が少なかったことから、2学期が始まると同時に1組担任と共同で、帰りの会を利用してスピーチの時間を設定した。ねらいは「人の前で大きな声で堂々と話すこと・人の話を黙って聞くこと」とした。お題は「好きな教科とその理由」から始まり、「宝くじで1億円当たったら」など楽しいお題も入れて、生活班の5人ずつが前に出てスピーチした。スピーチの前には必ず「安居中学校1年〇〇です」と自己紹介をしっかりとすることとした。

有り難いことに、1年生は皆、前に出て話すことを嫌がらず、授業で発表するときよりも大きなしっかりした声でスピーチができるではないか。その中において、Aさんはいつもよりも大きな声で、Bさんは礼儀正しくスピーチができていた。

2巡目のスピーチで、Bさんが「1億円当たったら半分の500万円はお父さんとお母さんにあげます。あとは自分で何かに使います。」と言ったひと言には大笑いした。金額の間違ひはあったが、体格のよい男子が両親への感謝の気持ちをスピーチし、学級の中でその子の言葉として普通に認められている様子を見た。学級の中でお互いを認め合う素地を育てるためにも、このスピーチの時間は有効だと感じた。

2. ふりかえり

カレンダー作りを週に1時間の楽しみな時間として、彼らの学校生活への意欲づけを図ってきた。パソコンを使って自分でカレンダーを作ることができるという自信を得て、友達とゆったりした時間を過ごしなが、継続して励むことができた自分の頑張りに気づいたのではないかと思う。

問題行動是正のためのエクササイズはもちろん必要だが、特別支援学級独自のポジティブな自立活動のあり方について、今後も探究していきたい。

【参考図書】中学生の進路適性ワーク 旺文社

朝の会・帰りの会アクティビティ 50 明治図書
新学習要領の展開 特別支援教育編 明治図書